

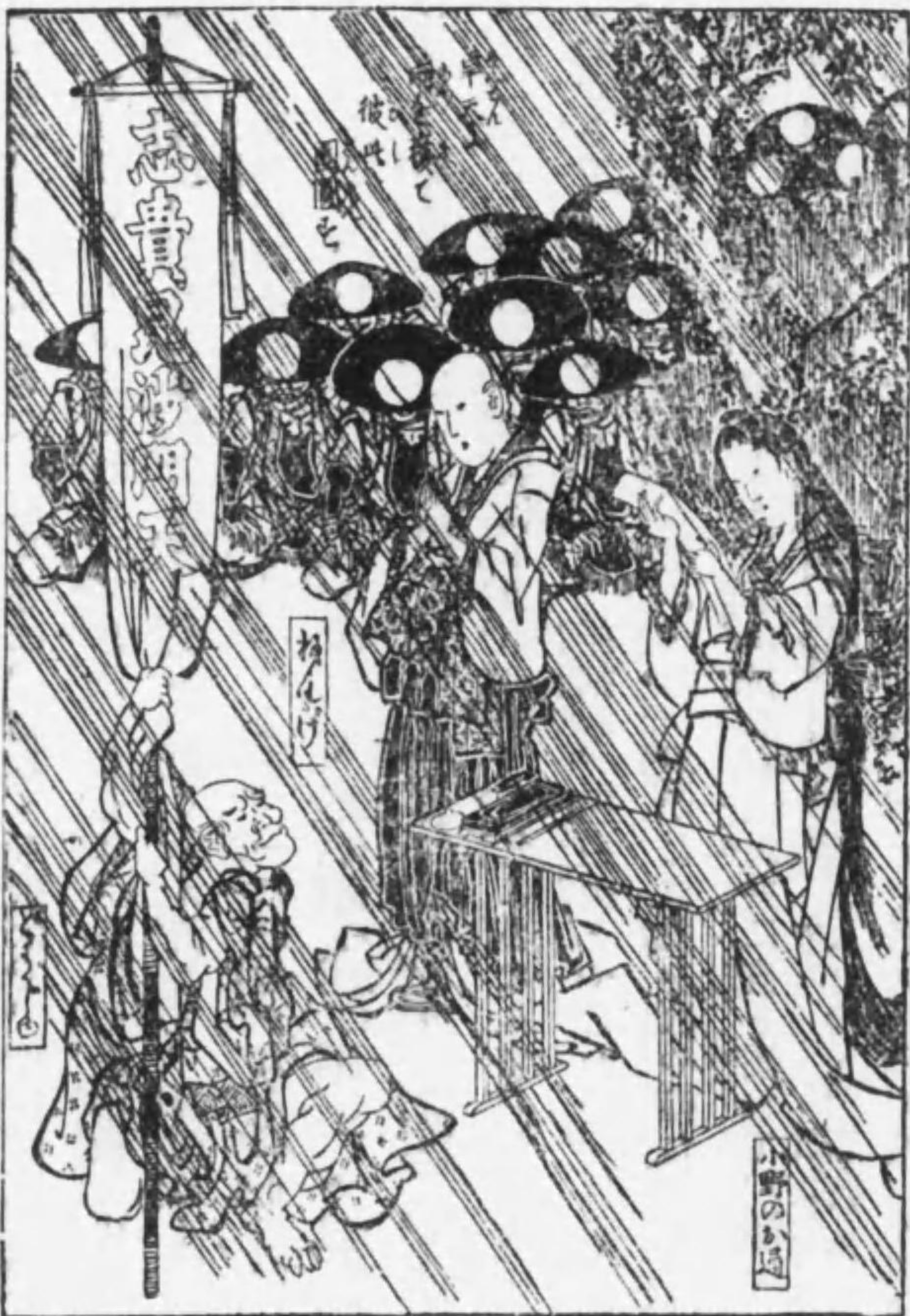
に、乳母して孚まれしは汝が妻の恩恵なり。又わが妹槐姫、去年よりこゝに身を寄せしも、汝が妻の恩恵なり。汝が妻はわが外祖母なり。汝肉縁なしと雖もわが外祖父なり。いかでかは殺すべき、提婆が悪も釋迦の方便、汝が妻の舊庵にて、汝忽地道心を發すこと、これ又汝が妻の徳なり。われ凱陣の時を得ば、實母増穂、養母晩稻、祖母小田井、義女お花孝子平作等が爲に、永年の法會を修し、拈華微笑の兩比丘尼をば、必ず大和へ伴ふべし。汝は今よりこの草庵に住持して、お花等が菩提を修、五町八反の良田を、寄附して讀經の料となさせん、餘命をしづかに送れかし。と叮嚀に諭し給へば、同樹は感涙滿の如く、順啓槐姫を伏拜み、又半七等を拜みけり。當下半七は、外母拈華尼、弟婦微笑等に、沼多の新關を越し難たりし日、關防牌面を惠まれし喜びを述べ、顔のいたく變り給へば、それとも知らず立別れし、いと愚にこそ覺しけんとして、身の懈を賠詰る程に、お通も八千川の危難を脱れて、こゝへ來りしところを物語れば、夏山は平太郎を呼

びて、半七等に逢しなどするに、時刻もうつりぬべし。半之進天うち仰ぎて、今日もはや申の時には遠からじ、いぬる日多治比へ遣はしたる、仙野呂東二は未だ歸らず、大江家の消息いかにあるらん、心もとなく候と、いふ言葉いまだ訖らず衝と走り來る呂東二道従、陣笠取つて跪けば、半之進信と見て、待ちわびたりし仙野呂東二、大江家の吉凶は、いかにくと小膝をす、めて、問へば呂東二鎧の袖を引きあはして、威儀を繕ひ、されば某多治比へ赴き、再三諜しあはすれば、大江太郎乙就朝臣、密に晴賢誅伐の謀を廻し給へど、その便宜を得ざりしに、時こそ來つれ陶晴賢は、嚴島へ詣づるよし、風聞をさくかくれなし。この時大江續井の軍船、不意に起つて攻討たば、晴賢を虜にしつべし。さはれ久しく雨ふらねばや、宮島の邊干潟となりて、自在に船を進めがたし、願ふ所は只雨のみ、もし終日雨ふらば、乙就が晴賢を、饗應の夫役と偽り、間道より嚴島へ押よせ給へ、彼處にて對面し、軍配をいひあはさん。と宣はせし返書はこれ、とさし

出せば、半之進受取りて、順啓に進らすれば、封皮推切つて讀くだち、乙就の謀略、その圖に當れい。刀治同樹懺悔して、善心に立かへれば、凡そこの件にありとあるもの、悪人は絶えてなし。只憎むべきものは晴賢のみ、しかれども雨ふらずば、容易陶を討ちがたし、頼む所は天女の擁護、拈華微笑は讀經して、辨財天女を祈れがし。と宣へば、厚倉隼人す、み出で、いにしへの小野小町は、歌を詠じて、雨を獲たり。今のお通も幼稚より、敷島の道にかしこく、秀歌をさくく多しと聞けば、雨乞の歌を詠せ、辨財天女を祝らし給へ。といふに順啓うち點頭き隼人いしくも申したり。天地を動すも、元來和歌の徳と聞けば、お通はこの旨心得て、準備せよと仰すれば、お通は再三辭しまうせど、桃姫傍より、他事もなく諭しす、めて、姫君の料にとて、厚倉が齋したる五衣緋袴、手親これを賜はれば、お通は推辭に言葉なく、退きて衣裳を更め拈華微笑もろともに、庭に出でつ、半涸れたる、曲演のほとりに立てば、軍兵等心を得て轉手に運ぶ經机

料紙硯を取りそえて、準備既に整へば、いと晴がましく見えにけり。かくて拈華微笑尼は、念珠を押揉合掌し、能與摠持大智惠聚、大辨財天、神體は是安藝國、沼多郡宮島に、宮柱太しく建て祝はれ給ふ、市杵島姫の神徳神威空しからずば今立地に雨ふらして、續井大江の兩義兵に、力を戮したび給へと、お通諸共且く念じて、嚴島を遙拜し、兩女の僧は恭しく、光明經の紐を解きて、三遍戴き、廣宜流布乃至得聞是經常令是等悉得猛利不可思議大智慧聚不可量福德之報。と讀經の聲の澄わたり、いとも尊く聞えしかば、お通は小雲時うち案じて、墨摺ながし筆を染めて、短冊に詠歌を書載し、筆を閑き、

日を経つ、民の草葉の、かれゆくに、めぐみの雨をいかでそ、がん。かくは三遍吟じつ、目上に捺ぐれば、天女感應したまひけん。庭の遣水浪だちて、一天俄頃に結陰、風颯とおとし來つ。彼知冊を空中へ、まきのぼするとぞ見えたりし、雷雨俄頃にふりそ、ぎ、草木も人も甦へれば、順啓同胞赤根厚倉、天



に歡び地に喜ぶ、同樹はさらなり軍兵等は、濡る、も厭はで、異口同音に、しばしは感じ止ざりけり。しかるにわきて不思議なりしは、この雨拈華微笑の面を打ちて、降流す程に、爛れたる火傷の跡、洗ふが如く癒え消えて、舊の如くになりしかば、兩女の僧の誠心を、天女憐み給へばこそ。一たび傷きたる容止のかくまに癒えんたること、いと有難き冥助なれとて、衆皆信心膽に徹して、未たのもしく思ひけり。順啓は殊更に、感悅頗る氣色に見はれ、拈華微笑が讀經の奇特は、能因が和歌に劣らず、お通が詠歌は小野小町が、雨乞に異ならず。か、れば能因の二字をわかちて、兩女僧が名に被け、能拈華、因微笑とやこれを呼ばん。またお通をば小町に擬して、小野小通と唱ふべし。得がたき雨をはや得たれば、時を移さず出陣せん。簀笠の準備せよと、宣ふ折から人馬共に直と濡れて、馳來るものあり、是則蟻松會太郎なり、柴門に馬乗捨て、衝と入りつ、順啓槐姫を見て跪き、郎君姫君へ申し候はん、さても大殿、去ぬる寅の日夢の中に、毘沙門

天影向して、告げたまひしことあるをもて、今日この處に郎君姫君の集合給はんよしを知召され、會太郎を遣はさる、所なり。郎君當家の大將軍として、晴賢を撃ち給ふに、無官にて在しませば敵これを侮らん歟。よりに室町殿へ申し請ふて大和介に任せらる。且つ姫君は、拈華微笑お通等を將て、一圓平城へ歸館あるべし、おん迎の偽參上せり。と演説すれば順啓は、謹んで父の命を受け、且つ蟻松を勞ひたまふ。その際に赤根親子厚合は、華やかに鎧ひつ、先陣後陣と立ならべば、微笑は涙さしぐみつ、平太郎が手を取りて、半七が側に推やり、おもふ程なる忠義を竭さで、空しくなりし父の代に、足手纏ひに侍るとも、此平太郎を伴ひ給へ。と云ひかけてまたうち泣けば、半七有理と平太郎を鎧の上に楚と負ひ親に代りて天折せし、弟笠松平作が、再びこゝに存命て忠義を演る四歳児の初陣伯父ら共に分捕させん。これらの事は念とせで故郷へ歸り給ひなば、家なる母とこゝに在す、蟻松翁へお花が事を言告げてたべ。とばかりに、鎧の袖を密と濡

す、雨はますますをやみなく、篠をみだして降りながせば、順啓魔を取りなほし
 時刻移らばいひがひなく、乙就に先せられなん。はや出陣と促し給へば、馬取の
 雑兵が、椽側近く牽据ゆる、月毛の駒も西へ入る、佛の利益、神の加護、めでた
 く凱陣遊ばせと、送る姫君、女僧、お通は、修羅の巻を見捨てつ、大和へとゆ
 く起程、残る同樹は八重葎、重藤の弓、朱柄の槍の、赤根厚倉勇しく、主を守護
 して立出けり。

占夢南柯後記終

昭和十一年一月十五日印刷

繪入葵文庫

昭和十一年一月二十日發行

定價金五拾錢

大阪市西區靱中通一丁目九番地

編輯兼 發行者 藤谷芳三郎

坪内
逍遙
鑑選

大阪市浪速區櫻川一丁目一〇五四

印刷所 西川印刷所

東京市神田區錦町一丁目九番地
大阪市西區靱中通一丁目九番地

發行所

電話土佐堀三六一九
振替大阪二七八五

藤谷崇文館

繪入葵文庫總目錄

10.	9.	8.	7.	6.	5.	4.	3.	2.	1.
常夏草紙	阿波之鳴門	旬殿實々記下	旬殿實々記上	古乃花双紙	八丈綺談	占夢南柯後記	三七全傳南柯夢	雙蝶記	松染情史秋七草
(お十郎清夏)	(お十郎兵衛弓)	(おしゆん兵衛傳)	(お俊兵衛傳)	(梅川兵衛忠)	(お三郎才)	(お七花半)	(三勝七半)	(あづま五餘)	(お久松)
勝曲川亭馬春亭書	葛柳飾亭北種齋彦書	歌川亭馬豐廣琴書	歌川亭馬豐廣琴書	盈齋北代繁書	蘭齋亭馬北嵩書	葛曲飾亭北馬齋書	葛曲飾亭北馬齋書	歌川東京豐廣書	歌川亭馬豐廣書

終

